

(実践報告)

## 「看護技術論Ⅰ」における遠隔授業の実際と看護技術教育の課題

清水八恵子<sup>1)</sup> 水越秋峰<sup>1)</sup> 森本直樹<sup>1)</sup> 佐藤章伍<sup>1)</sup> 神谷美香<sup>1)</sup> 須賀京子<sup>1)</sup>

### Ⅰ. はじめに

看護基礎教育における専門科目である基礎看護学は、看護師を志す初学者に対する動機づけとなる科目の1つであり、なかでも看護技術は講義・実技演習で構成され、知識とともに技術習得が求められる。日本学術会議健康・生活科学委員会看護学分会(2017)は、看護学の定義の中で、「健康状態のアセスメントに基づき、栄養の摂取、排泄の調整、清潔の維持、健康回復のための診療の補助、知識の提供、セルフケアのための技術支援、療養環境の整備等を通してその人に必要な専門的援助を提供する」と述べている。さらに、実技演習については、「特に患者への直接的なケアでは、シミュレーター等を用いた事前の十分なトレーニングを経て患者に実施する必要がある」とした。このように、看護技術は対象に必要な専門的援助を実践で学び、練習を重ねることで修得していく。

2020年度前学期は新型コロナウイルス(以下COVID-19と略す)の感染拡大防止の観点より、本学においても原則として全学部において事前収録映像のオンデマンド配信による遠隔講義(以下遠隔授業と略す)を実施することが決定し(朝日大学, 2020)、日々変化する状況に混乱を極めた波乱の年であった。2020年度の新入生は、入学した矢先、対面での講義(以下対面授業と略す)から遠隔授業への変更を余儀なくされた。一人でinformation and communication technology(以下ICTと略す)機器に向かい、慣れない専門用語が多い看護学科の講義を受けることは、新入生に大きな不安を与えたと推察する。これらについては学内の調査結果からも、慣れないパソコン操作や印刷、Web上での課題提出など、遠隔授業を受講する環境に対する不安が聞かれた。

教員の立場からも、見えない学生を相手とする教授方法や内容には、大きな戸惑いがあった。特に、生活の援助技術を扱う演習科目である看護技術論Ⅰでは、遠隔授業という初めての授業方式をとる必要があり、さらに看護技術の修得状況の確認の難しさに直面した。しかし、このような「見えない教育」だからこそ、授業構成、課題の精選、動画の活用など担当者間で検討を繰り返し、初めて基礎看護学を学ぶ学生に配慮しながら授業内容の構成に取り組んだ。そして、感染状況や社会情勢を踏まえた大学の方針のもと、限られた時間であるが対面による演習が実施可能となり、早急に演習計画を作成し実施した。そこで本稿では、2020年度に実施した看護技術論Ⅰ遠隔授業の実際、対面による演習の効果や学生の思い、今後の技術教育の課題について報告する。

### Ⅱ. 対面授業との乖離を最小限とした遠隔授業の実際

#### 1. 科目概要と到達目標

看護技術論Ⅰの科目概要および到達目標は、以下に示す通り前年度と同様とした。これは、教育の質は担保するという大学の方針に則り、後述する教授方法や教材の工夫を行うことを前提としたものである。

##### 1) 科目概要

看護の対象である人間を生活者としてとらえ、人間にとっての日常生活行動の意味を理解し、対象の日常生活を支援するための科学的根拠に基づいた看護技術を学ぶ。本科目は、看護場面に共通した技術、基本的な日常生活援助技術の修得を目指すものである。講義・演習を通して、人間の尊厳の尊重、援助の人間

---

1) 朝日大学保健医療学部看護学科(基礎看護学講座)

関係のあり方を理解するとともに、患者、看護師双方の安全・安楽を考慮した援助方法とその根拠を学ぶ。

## 2) 到達目標

- (1) 看護場面に共通する安全・安楽を守るための基本的な看護技術を実施できる。
- (2) 日常生活を支援する看護技術の科学的根拠、原理・原則を説明できる。
- (3) 対象者の安全・安楽・自立に配慮した日常生活を支援する看護技術が実施できる。
- (4) 看護技術の実践を通して人間の尊厳について考えを述べるができる。

## 2. 遠隔授業の構成

2020年度前学期は、「新型インフルエンザ等特別措置法に基づく緊急事態宣言」が全国に発令（首相官邸、2020）されるなど、COVID-19感染拡大の先行きが不透明な状況の下で開始された。看護技術論Iにおいては、遠隔授業として従来の講義に相当する内容を優先して実施し、初めて看護技術を学ぶ学生の混乱を最小限にするために授業進度はシラバス通りとした（表1）。

表1. 看護技術論I シラバス（一部抜粋）

回	単 元 名
1	ガイダンス、看護技術とは、日常生活行動
2	安全・安楽・自立と看護技術
3	環境調整の援助：人間と環境、療養生活環境、療養生活環境調整の援助
4	環境調整の援助：ベッドメイキング、リネン交換
5・6	活動と休息の援助：ボディメカニクスの意義と原則、健康と生活リズム、活動・休息の効果とその援助
7・8	バイタルサインとは、バイタルサイン測定の意義と方法
9	感染予防：感染とは、スタンダードプリコーション、感染防止の技術
10	食と栄養の意義、食行動と栄養摂取のメカニズム、食の援助、口腔ケア
11・12	排泄の意義、排便・排尿のメカニズムと排泄援助
13・14	清潔・衣生活の意義、清潔行動援助の必要性と方法

## 3. 遠隔授業に向けての取り組みと実際

### 1) 学内方針との調整

本学の遠隔教育運営チームが主催する研修に参加し、「遠隔授業の考え方」「講義コンテンツ作成指針」「学生とのインタラクション」「出欠管理」「著作権」「配信方法」など、遠隔授業の理解に努めた。研修を通して遠隔授業では、映像の視聴に伴う時間的な負担や、初学者の集中力に配慮し、対面授業と同等の時間確保は困難であるという前提に立つ必要性が明確となった。そこで、遠隔授業の時間を可能な限り短縮すると同時に従来の対面授業で教授する内容の質を維持することを常に意識し、学生が自己学修をしやすいように対面授業時以上に教科書を中心に授業展開することを意識して準備をすすめた。映像の配信は、遠隔授業運営チームを中心としてアップロードなどの手続きを進め、外部のストリーミングサーバーを使用して行った。

### 2) 科目概要および到達目標の周知

従来、科目概要および到達目標は、「基礎看護学講座学修ガイド」として紙資料を配付し、学生に周知してきた。しかし、遠隔授業の制約から、Learning Management System（以下LMSと略す）上で「講義のねらい」として周知した。各単元の学修目標は、すべての単元履修後に到達目標を達成できる授業内容となるよう担当教員間で調整し、各単元の最初に周知した。

### 3) 講義資料と課題の配付

講義資料や課題は、LMSにアップロードして学生に配付した。ただし、インターネット通信環境やICT機器などを保有する状況には学生によって差があることから、受講に必要な資料などを印刷ができない学

生がいることが判明した。そのため課題に関しては、全単元の課題に必要な資料を冊子として配付するとともに、既に印刷して取り組んだ課題を貼付することを許可し、印刷レイアウト等の差異にとらわれずに課題のテーマにそって課題に臨むように指導するなど柔軟に運用した。さらに、配付した課題は、学内演習および基礎看護学実習Ⅰの事前学習や復習に活用できるよう配慮した。

#### 4) 映像の作成と配信

配信用の映像は、プレゼンテーションソフトウェアの収録機能等を用いて、各単元の担当教員が作成した。学生が円滑に視聴するための配慮として、多様な端末で再生することをふまえた文字等のサイズやレイアウトとし、映像や音声の調整を行った。また、講義の配信時期は本来の授業進度に合わせ、学生が計画的に受講できるように配信の準備を進めた。

#### 5) 既存映像教材の使用

看護技術のイメージ化を促すための映像教材は、学科として導入された看護分野に特化した動画配信サービスを活用することで、著作権上の問題なく既存映像教材を自由に視聴できる環境を整えた。さらに、教科書に副教材として付属する動画の視聴も講義内で勧め、シミュレーションを繰り返す必要性を授業毎に伝えた。

#### 6) 学生の質問等への対応

各単元の担当教員が、LMS上のフォーム、メール、電話等の複数の連絡手段を提示し、随時質問や相談に対応した。学生から寄せられた質問は、授業内容に関する質問と映像視聴等に関する技術的な問合せが約半数ずつであった。

### Ⅲ. 指定時間内での対面授業（技術演習）

#### 1. 技術演習の計画

本学においては緊急事態宣言解除以降、段階的に対面授業が再開された。限られた授業期間において、学生同士の密を避けて技術演習を実施する必要から、少人数の3クラス編成（A～C）とし、各クラスで演習を実施した（表2）。

演習内容は、時間的制約から本来計画していたすべての技術を実施することが困難であると判断し、基礎看護学講座内で項目を検討した。その結果、基礎看護学実習Ⅰ（看護の場と対象）の内容を中心として、他の技術との関連性をふまえた原理・原則の重要性を視野に入れた必須の項目を選定した。特に演習①では項目数が多いため、時間配分を繰り返し検討し、演習計画を作成した。

表2. 対面授業（技術演習）の実際

クラス	演習①	演習②
A	1日目・午前	2日目・午後
B	2日目・午前	1日目・午後
C	3日目・午前	3日目・午後

演習①：ベッドメイキング（下シーツ）、エプロン・手袋の着脱、  
体位変換・寝衣交換  
演習②：バイタルサイン（血圧測定）

#### 2. 技術演習の実際

計画通りに技術演習を実施した。特に、ボディメカニクスの活用を伴うベッドメイキングや、確実な手技が求められる個人防護具の着脱、他の技術の修得に係る体位変換については、実習室のモニターを用いてデモンストレーションを取り入れながら演習をすすめた。血圧測定については修得の難易度を考慮し、十分な時間をかけて実施した。演習全体を通して、学生の実施場面をみながら必要に応じて助言・指導し、目視で学生の技術修得の確認をした。

#### IV. 前学期遠隔授業を通しての学生の意見

看護技術論 I で実施した遠隔授業について、その学修効果や課題を検討するため、学生の意見を確認した。

##### 1. 学生からの意見の収集

遠隔授業の配信が全て終了した後に、履修生に対して LMS のメッセージで協力を依頼した。質問項目は、「遠隔授業の良かった点、困った点」「動画視聴やシミュレーションによって看護技術が修得できた感覚の有無」「看護技術の講義は遠隔・対面のどちらが良いと思うか」の3点の自由記載とした。意見の収集にあたり学生には、回答は自由意志によること、成績とは無関係であること等を説明し、回答への強制力が働かないよう努めた。

##### 2. 学生の意見

質問した項目に対する学生の意見（一部抜粋）を表3に示す。

###### 1) 遠隔授業の利点・欠点

遠隔授業の利点として、一時停止できる、見返すことができる、自分のペースで受講できるなど、映像のオンデマンド配信に特徴的な記述があった。ポイントが絞られていた、授業資料が見やすかったなど、遠隔授業に特有の利点であるか判断のつかないものもあった。

遠隔授業の欠点としては、「実際に見ていないとイメージがしにくい」という意見のほか、課題の多さや、知らない単語・難読漢字に関する指摘があった。

###### 2) 看護技術が修得できた感覚

「修得した感覚はない」「実際やってみるのでは全然違う」という記述の一方で、「流れは理解できた」と前向きに捉える者、「いざとなるとできなさそう」など修得への不安を感じている者もいた。

###### 3) 遠隔授業と対面授業のどちらが良いか

対面授業が良いとして、他人との関わりがあることや、実践できることを挙げていた。一方で、遠隔授業について「より理解が深まる」など好意的に捉える者もいた。

表3. 遠隔授業に関する学生の意見（一部抜粋）

質問	回答
遠隔授業の良かった点、困った点について	<ul style="list-style-type: none"> <li>・何度も見直しができるところ。</li> <li>・ポイントが絞られていて何が大切かわかりやすかった。</li> <li>・動画を止めて確認できるところ。</li> <li>・授業資料が見やすくわかりやすかった。</li> <li>・自分のペースで授業が受けれること。</li> <li>・課題が多かった。</li> <li>・知らない単語や漢字がわからないときが困った。</li> <li>・実際に見ていないとイメージがしにくいこともあった。</li> </ul>
動画視聴やシミュレーションによって看護技術が修得できた感覚の有無	<ul style="list-style-type: none"> <li>・技術を行う流れは理解できた。</li> <li>・修得できた気はする。</li> <li>・動画で分かったつもりでもいざとなるとできなさそうで不安。</li> <li>・あっているのか間違っているのか判断が難しく不安。</li> <li>・実技は想像と実際やってみるのでは全然違う。</li> <li>・家でできることは限られるので修得した感覚はない。</li> <li>・物品を使用したり2人以上の技術は修得できた感覚はない。</li> </ul>
看護技術の講義は遠隔・対面のどちらが良いと思うか	<ul style="list-style-type: none"> <li>・遠隔授業はより理解が深まっていると感じた。</li> <li>・遠隔授業で確認のための対面授業でもいい。</li> <li>・遠隔授業で知識を入れたうえで定期的な演習の授業が組み込まれるのも良い。</li> <li>・やってみないとわからないこともあるので対面がいい。</li> <li>・人と関わりながら行うことで理解を深めてモチベーションを上げることができる。</li> <li>・出来ること、できないことが明確にわかる対面がいい。</li> <li>・実践を行いたい。</li> </ul>

## V. 対面授業（技術演習）を通しての学生の意見

技術演習終了後に記述した演習項目ごとの振り返りでは、以下に示す意見があった（一部抜粋）。

技術演習を終えた学生は、対象とのコミュニケーションの難しさや技術項目の多さを挙げた。「実際にやらないと分からない」「実際は難しかった」など、遠隔授業でイメージした内容とのギャップを指摘する者もいた。

- ・わからないことを仲間や教員に質問しながら演習できた。
- ・技術は実際にやらないとわからないから対面で演習したい。
- ・動画で簡単そうに見えても、実際は難しかった。
- ・たくさんの項目があって大変だった。
- ・対面で演習ができてよかった。
- ・声かけが難しかった。
- ・実際に物品を使って勉強できてうれしかった。
- ・相手がいると実際にコミュニケーションをどのようにとればよいか理解できた。

## VI. 考察

### 1. 看護技術教育における遠隔授業の実際

全国の大学教員を対象とした2020年6月～9月の調査（全国大学高専教職員組合，2020）では、「約80%の大学教員が例年と比べて負担が増えた」と回答した。遠隔授業において特に授業資料の作成については、著作権等の関連から対面授業以上に配慮が求められており、より多くの労力を要している。一方で遠隔授業を受けた学生の中には、「見やすかった」「わかりやすかった」など好意的に受け止める者もいた。COVID-19の影響下において教員は、学生にどの程度の理解度を期待できるか不安を抱き、初めて学ぶ学生が少しでも理解しやすいように検討を重ねたことで「見やすかった」「わかりやすかった」との意見につながり、結果として精選された授業内容が学習効果につながった可能性がある。

遠隔授業についてのメリットとして、「動画を何回も視聴することができる」という意見が多く聞かれた。大学の講義映像を予め視聴する試みは従来から行われており、看護技術教育における親和性の高さや、演習と組み合わせることの教育効果が期待されている（水越，2014）。聞き逃した箇所を繰り返し確認できる、一時停止ができる等の映像教材のメリットに加えて、短時間ではあるが技術演習を組み合わせることが、学生の理解を深めた可能性がある。遠隔授業は必ずしも学生にとって学習効果がないわけではなく、メリットもあったと判断する。

演習については「対面」がよいという意見が圧倒的に多かった。岩屋ら（2017）は看護技術の習得について、学習者が様々な方略を用いて自らの技術を振り返ることが有効であるとした。学生の「動画で分かったつもりでもいざとなるとできなさそうで不安」「あっているのか間違っているのか判断が難しい」といった意見があるように、動画の視聴やシミュレーションだけでは、技術を「理解する」ことはできても「実施する」ことに不安が残る。今後も遠隔授業を伴う技術教育を継続する場合は、学生が実際に実施し、自らの技術を確認する時間を、可能な限り確保する必要がある。

### 2. 学生の意見を踏まえた今後の看護技術教育への示唆

対面での技術演習では基礎看護学実習Ⅰも見据え、必須の項目を選定したが、演習①では、項目数が多く、演習項目が次々に変わる演習の組み立てであった。そのため、本来2コマで実施する演習項目も、対面演習用としてポイントを絞り実施したため、初めて実施する学生にとっては負担が生じていた可能性もある。しかし、1学年一斉に技術演習を実施するときに比べると3クラス編成であったことから学生に目を向けることができ、質問などの対応や指導も効果的に実施できたと考える。

看護技術は単に方法を覚えて実施するだけではない。その技術の意味を学び必要性を考え、その対象に応じた最も望ましい援助の実施が求められる。そして援助の際はコミュニケーションを通して対象と信頼関係を築き、安心して安全な技術を提供しなければならない。そのためには「声かけ」や「説明」という言葉によるかわりが必要で、それは演習を通して修得する重要な技術の1つである。実際の演習では、学生が患者役となることで患者の思いについて考察するとともに、看護師役と患者役の学生が実施した技術に対する気づきや疑問点などについて意見交換をすることで技術に対する理解を深める。このように、「対面による技術演習」は看護技術修得に欠くことのできない学習機会である。

しかし、COVID-19収束の見通しが見えない中、「対面による演習」が望ましくても実施できない可能性もある。したがって、今年度実施した遠隔授業や対面による演習から明確になった学生の意見を活かしながら、今後も遠隔授業を視野に入れつつ、対面・遠隔どちらの授業方式であっても看護技術を学ぶ学生に不利益のない学習環境を調整し、限りなく差異のない学修内容を継続して検討していく必要があると考える。

## Ⅶ. 今後の課題

遠隔授業のあり方について模索しながらも2020年度生の看護技術論Ⅰが終了した。遠隔授業に対する肯定的な意見に対して「技術演習」については対面による演習を望む声が圧倒的に多かった。今年度の遠隔授業から、「実践すること」の重要性について多くの学生が考えていることが明らかとなった。しかし、「遠隔」という授業方式を取らざるを得ない場合は、今年度の授業で明確になった学生の不安点を改善できる「技術演習のあり方」について検討していく必要がある。

看護技術の根拠となる基本的な知識に関して十分な学修効果が得られたかどうかは、学生個々の学修への取組みに依るところが大きい。今年度の遠隔授業の評価から、今後どのような困難な状況下であっても看護技術修得に向けた技術教育内容の質を下げることがないよう、努力することが求められる。

## 文 献

- 日本学術会議健康・生活科学委員会看護学分科会 (2017). 大学教育の分野別質保証のための教育課程編成上の参照基準看護学分野, 2-3.
- 朝日大学 (2020). 2020年度前学期授業等の実施に係る方針について. [asahi-u.ac.jp/topics/2020/4711/](http://asahi-u.ac.jp/topics/2020/4711/), 2020-04-02.
- 岩屋裕美, 戸ヶ里泰典 (2017). 看護技術の習得における自己調整学習方略と学習成果との関連—首都圏の看護短期大学および看護専門学校の学生を対象とした調査より—. 日本看護研究学会雑誌, 40(5), 849-858.
- 水越秋峰 (2014). 看護技術教育における反転授業の可能性. 新しい医学教育の流れ2014年夏, 114-115.
- 首相官邸 (2020). 新型コロナウイルス感染症対策本部 (第29回). [kantei.go.jp/jp/98\\_abe/actions/202004/16corona.html](http://kantei.go.jp/jp/98_abe/actions/202004/16corona.html), 2020-12-22.
- 全国大学高専教職員組合 (2020). 新型コロナウイルス感染症への対応下での労働実態・教育研究状況アンケート報告. [zendaikyo.or.jp](http://zendaikyo.or.jp), 2020-10-23.